

宮沢賢治と化学本論

小野 昌弘(化学担当学芸員)

宮沢賢治と言えば、とても有名な詩人・童話作家ですから、皆さんも何かしら彼の童話などを読んだことがあるのではないのでしょうか。当館でも全天周映画で「銀河鉄道の夜」を上映し、とてもたくさんの方に見ていただいた事があります。宮沢賢治の作品は、読み手によっていろいろな印象や思いを抱かせるため、さまざまな賢治像、作品像を作りだします。そして、彼自身の生きざまや考えに共鳴する人が多いのも特徴ですね。

タイトルに宮沢賢治と化学本論と書きましたが、化学本論って何？ということをご紹介します。



宮沢賢治(1896-1933)

宮沢賢治

1896年岩手県稗貫郡里川口村(現:花巻市)生まれ。戸籍上は、8月1日生まれですが、当時、父親が関西方面へ出張中であったことや、陸羽大地震の混乱などのため、実際には、8月27日生まれだったのをさかのぼって戸籍を作ったようです。宮沢家は、花巻では、とても豊かな質屋・古着商で、その長男として生まれています。父方の祖先をたどると、元禄時代に亡くなった藤井将監(しやうかん)(1696没)という人までさかのぼれるそうです。この人が、京都から花巻に入り、その後の家系で、姓が「宮沢(澤)」になり、賢治の時代につながりません。

少年時代から、石っこ賢さんと呼ばれることがあったように、石・鉱物集めに興味を持っていたり、中学生の頃から詩を作るなどありましたが、宮沢家が浄土宗門徒であったことから、仏教からも深く影響を受けていました。

そして、1915年4月に、盛岡高等農林学校(現:岩



盛岡高等農林学校本館(現:岩手大学農業教育資料館)

手大学農学部)農学科第二部(農芸化学科)に合格者89名中、主席入学(!)を果たします。そしてこの年の2月には、片山正夫著「化学本論」が発刊されています。そう化学本論とは、化学の教科書なのです。

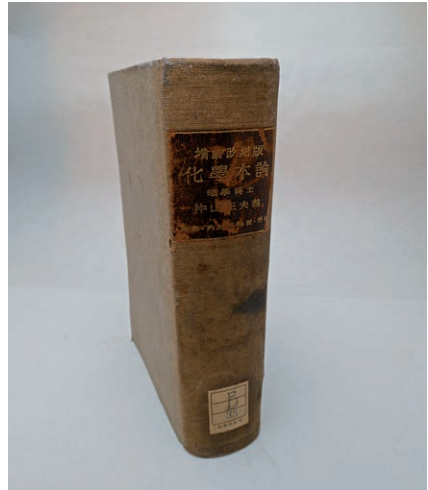
賢治は、その後農学校を卒業し、法華経への改宗、人工宝石の製造や販売を考えたり、花巻農学校教員、羅須地人会の設立と農地改革、また、東北砕石工場の営業マンとして活動をしつつ、いろいろな、詩・物語を書き続けています。

賢治と化学本論

詩人・童話作家としての賢治の生き方のベースになっていたのは、「仏教」の教えと、「科学」でした。特に小さいころから始めた石集めをはじめとする、地学系への興味、そして農学校時代に学んだ化学などは、かなり影響を受けたとみていいでしょう。この仏教と科学の2つが賢治の生きるモチベーションであり、思想を作る両輪だったと言われます。そしてその支えとなったのが「法華経」と「化学本論」でした。

賢治が入学した盛岡高等農林学校は、国立で初めて作られた高等農林学校で、東北新興のために盛岡に作られました。ここで農地改革、食糧増産、農業関係者の育成を担いました。中でも賢治は、農業化学に携わり、化学を学びます。賢治が高等農林に入学した時に発刊された「化学本論」は、当時最先端の化学の教科書でした。化学本論の第1版の序文には、「～今や放射能の研究、電子説、量子説等の発達は、飛行機の襲来の如く学者を悩ましつつある。」とも記されています。この1915年は、ヴィルシュテッターがクロロフィルの研究でノーベル化学賞を、ブラッグ親子がX線による結晶の構造解析でノーベル物理学賞を受賞しています。新しい理論や、観測機器の発達で、科学がますます面白くなっていくところに、賢治は農林学校に入学し、化学本論を携え、勉強をしたのでしょうか。彼の生き方にも大きく影響を与えた「化学本論」、当館には、大正13年12月27日購入とサインのある化学本論があります。

賢治がこの本で化学を学んだのかと思うと、化学をかじったものとしては、感慨深いものがあります。いろいろ背景を語れるこの「化学本論」、機会を見つけて展示場に展示したいと思います。



化学本論(大正13年第7版)。これは、市立大阪市民博物館で購入し、電気科学館、当館へ引き継がれてきたもの。賢治もこれを読んで化学を学んだ。